

イントロダクション：ポスト・モダニティの呪術論 にむけて

東, 賢太郎
宮崎公立大学人文学部

<https://doi.org/10.15017/2344597>

出版情報：九州人類学会報. 36, pp.44-49, 2009-07-12. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



論文

イントロダクション

—ポスト・モダニティの呪術論にむけて—

東 賢太朗 (宮崎公立大学人文学部)

キーワード：呪術、モダニティ論、ポストモダン、他者

I. はじめに

私たちが、ある対象についてしつこく語り続けるとき、それはその対象を理解したい、あるいはその対象にまつわる不明点や疑問点、謎を解明したいという目的でなされる場合と、むしろ語り続けるという行為自体が、何らかの創造や生成、または喜びや楽しみへとつながっている場合が考えられる。例えば、永遠に繰り返される恋愛や性愛についての語りは、後者の場合を多く含むだろう。その正体が何であれ、語り続ける行為へとどうしようもなく惹きつけられてしまうような妖しくも悩ましい対象。

実は、呪術もそのような対象ではないかと最近では考え始めている。誤解のないように述べておくと、そう言ったからといって、この謎に満ち溢れた魅力的な対象への理解や解明を放棄しているわけではない。人類学や隣接領域において脈々となされてきた、呪術現象の根源的な理解や解明に向けての探求は、ぜひとも継続されねばならない。が、しかしながら一方で、理解や解明への頑なな姿勢がときに覆い隠してしまう、呪術について語ることに、語り続けることの意味やポテンシャルに、私たちはもう少しだけ敏感であってもいいかもしれない。そのように、「呪術論」をやや拡大解釈しておくことから、本特集「ポスト・モダニティの呪術研究へ¹⁾」のイントロダクションを始めてみたい。

II. 呪術という課題

いま (さら)、なぜ呪術論なのか。呪術論を人類学における課題として取り上げる現代的意義とは何か。その問いに答えるためには、人類学における呪術論の系譜をやや教科書的にふり返る必要があるだろう。西欧の「文明」社会から眺めた「野蛮」や「未開」についての学として、理解困難な新大陸や植民地の他者について、またさらにその他者たちの理解困難な行為や思考について、人類学はもっぱら取扱うことから出発した。そのことは、ふたたび確認するまでもない。その際に、西欧や文明という「自己」に対する「他者」の他者性を最も顕著に具現するものの一つとして、呪術は人類学者たちの興味関心を強く喚起したのである。科学や宗教と異なる一見して非合理的な呪術的思考に、あるいは超自然的な力によって目的を達成しようとする呪術的实践に遭遇した人類学者は、その徹底的な他者性に戸惑いながらも惹きつけられて、理解や解明への取り組みに没頭していくことになる。その時点で、呪術は人類学における典型的な他者として対象化されていったのである。

それゆえに、人類学の始祖の一人であるフレイザーが、高名な類感呪術と接触呪術の分類とともに、呪術—宗教—科学という進化論的図式を打ち出したのは、未開社会

における呪術の他者性を前提にしていたという点から頷けるものである〔フレーザー 1951-1952〕。続いて、トロブリアンド諸島のクラ航海や農耕儀礼にみられる呪術の社会的機能に注目したマリノフスキー〔マリノフスキー 1980〕が萌芽となり、アザンデ人による不幸の説明体系すなわち災因論としての呪術に着目したエヴァンズ＝プリチャード〔エヴァンズ＝プリチャード 2001〕によって花開いた、イギリス構造＝機能主義による呪術論が学説史の主流となった。その後は、構造＝機能主義を受け継いだマンチェスター学派を中心に、アフリカ地域を中心とした呪術研究が 1970 年代まで継続していく〔Marwick 1965 ; メア 1970〕。また、ほぼ同時期のフランスでは、モースによるマナ概念を発展的に継承しながら、呪術を「浮遊するシニフィアン」概念によって説明したレヴィ＝ストロースの構造主義的な呪術論〔レヴィ＝ストロース 1972〕が展開していたことも忘れてはならない²⁾。いずれにしても、当時人類学の中心であったヨーロッパにおいて、数々の名高い人類学の巨人たちが、こぞって呪術を対象として研究を進めていたことは明白だろう。そして繰り返しになるが、その背景には、呪術が人類学にとっての典型的な他者として、人類学者たちの欲望を喚起し続けていたということが挙げられる。

しかしながら、呪術論の黄金期を支えていた呪術の他者性は、その後むしろ人類学における呪術研究の衰退を招くことになる。構造機能主義によるアフリカでの呪術研究が縮小再生産を繰り返し行き詰まりをみせたことに加え、1980 年代以降は医療、教育、開発など現実的諸問題への対処や介入を志向する応用人類学が盛んになったこと、また同時期に民族誌が内包する他者表象の認識論や政治性への批判と内省が繰り返されたことによって、呪術研究は人類学の花形の研究対象としての立場をいったん退くこ

とになる。呪術研究を強く支えていた他者性は、人類学の社会問題への関心の高まりや自国回帰の流れ、あるいは他者表象をめぐる内省的批判の中では、むしろあだ花となった。人類学は他者よりも自己へ、理解困難なものから対処可能なものへと方向を修正し、そしてあからさまな呪術の他者性への称賛は未開社会へのオリエンタリズムとして批判の対象となった。もはや、人類学者は素朴な他者への欲望に導かれて、呪術の楽園への扉を容易に叩くことができなくなってしまったのである。

III. モダニティ論を超えて

さて、一度はほぼ衰退の一途をたどった人類学における呪術研究は³⁾、1980 年代後半から現在までの間に、驚くべき、そして華麗なるカムバックを果たした。カムバックの原動力となった呪術研究の担い手たちを、ここでは大きくまとめて、呪術の「モダニティ論」の論者たちと呼びたい。コマロフ夫妻やゲシーレに代表されるモダニティ論者たちは、次のような視点や特徴を共有しながら、特にアフリカ地域を中心のフィールドとして、精力的に研究成果を提出し続けている〔Comaroff & Comaroff 1993 ; Geshiere 1997〕。

まず、彼／女たちは、呪術的な諸事象や諸実践について、それらを「近代」から切斷し衰退しいずれ消滅しゆく「伝統」というゾーンに囲い込むことはしない。否、むしろ市場経済や国民国家、またグローバル化といったきわめて近代的な事象と連動しながら、近代においてこそ呪術が活性化するのでという視座を強調している。次に、近代において呪術は活性化するだけではない。それは、急激な社会変動に対して、流動的に開かれた現在体として、つねにその姿を変化させていく。さらに、呪術はモダニティ論以前の呪術論が対象としたように、

部族社会や地域共同体といった限られた範囲内で機能するのではない。それは、血縁や地域を超えて、ときにナショナルな、ときにグローバルなレベルで展開する。また、近代がその内に含みこむ様々な矛盾に対して、呪術はそれら矛盾に対する人々の批判やメタ・コメントとして機能しているというのもモダニティ論者たちに共通する視点である。呪術的な認識や実践は、様々なリスクや危険、増大する一方の格差、脅かされる生存基盤などに対する解釈や対処となることにより、近代の一元化する支配に対しての抵抗やオルタナティブとなっているのである。

以上のように、呪術のモダニティ論がなした貢献は大きい。人類学の中心テーマである呪術研究の再活性化による、あるいは近代化やグローバル化といった近年の人類学のトレンドへの対象の拡充による貢献は言うまでもない。が、もっとも大きくカウントすべき貢献は、呪術が我々とは異なった彼らのものであるという認識、そして西欧的な自己に対置される未開または非西欧の他者によるものであるという認識に風穴を開けたことではないだろうか。先述のように、呪術はその他者性によって人類学者の欲望を喚起し続けてきたのだが、同時にその他者性によってこそ近代人類学の対象としての魅力を損なってしまった。だが、モダニティ論における呪術とは、もはや未開や非西欧の他者ではなく西欧近代という自己のうちに内包されているもの、すなわち医療や教育や開発と同じく、近代という同時代に生きる人類の営みとして対象化されるべきものなのである。

しかしながら、呪術のモダニティ論に対しては批判の声も少なくない。まず挙げられるのは、モダニティ論がアフリカ地域中心の民族誌資料をもとに練り上げられた理論であることから、地域的な多様性を軽視しているという批判である [Moore &

Sanders 2001] ⁴⁾。またモダニティ論が、呪術と近代の関係に注視することにより、それが過度に近代一元論に陥っているという批判もある。呪術は本当に、近代における資本主義経済の浸透と格差増大によってのみ発生し増加しているのであろうか。ここでは、グローバルな資本主義経済システムと個別社会の社会関係との相互関係が軽視されているのではないか [近藤 2007]。あるいは、呪術を過度に近代というコンテクストにおいて語ることは、呪術について語ることよりも、むしろ近代について語る際のインデクスとしてのみ呪術を扱うことになりかねない。そこからさらに、近代というコンテクストの矛盾や問題点について、呪術はそれを象徴的に表現しながら抵抗し、あるいはときに近代に対して積極的に参与したり介入する人々の手段となっているという読み込みも可能になる。だが、はたして人々は呪術的な認識や実践によって、意図的に近代に向かい合っているのであろうか。またそのように読み込むことが可能なのは誰であろうか [浜本 2007; 石井 2007]。あるいは、学説史的にモダニティ論を見直した際に、はたしてそれが以前の議論とどの程度異なっているか、またどのように斬新なのか若干不明な部分もある。例えば、構造＝機能主義的な呪術論において中枢であった、呪術は社会の葛藤を表し、またその葛藤の調停手段となるという発想は、部族や共同体から国家やグローバル世界へというコンテクストの広がりを除けば、まったく同じようにモダニティ論においても当てはまる。近代のはらむ葛藤や矛盾の象徴的な表現や抵抗として、呪術は機能しているというモダニティ論者たちの主張である [浜本 2007]。

だが、それら批判の中で、私が最も重要だと考えるものに、カフェラーによるモダニティ論に対する認識論的な批判がある [Kapferer 2002]。その内容は、概ね以下

のようなものである。モダニティ論以前の呪術論において、呪術とは我々と異なる彼らの他者性を具現するものであった。呪術を実践する人々が現実的な他者であると同時に、呪術という概念自体が多分に他者性を有しているという意味でも。それに対して、モダニティ論者たちはもはや、呪術が我々と対置された彼らのものであるとはいわない。呪術は、近代という同時代のコンテクストに置かれた、幅広い「我々」の内にあるものである。その意味で、先述の通りモダニティ論における呪術は他者ではなく、また他者のものではない。だが、その地点からカフェラーは批判を開始する。すなわち、モダニティ論者が見出す我々の内にある呪術とは、言い換えれば近代と呪術の接合の局面である。十分に近代化し合理的であるはずの我々の内に、いまだ見出される非合理的な呪術。そして、その非合理的な呪術は、近代の矛盾と葛藤によって呼び起こされた想像力や実践である。つまり、モダニティ論における呪術とは、我々のうちに見出される非合理的な他者であり、またその他者性は究極的には合理的な近代のはらむ脆弱性や不確定性として、システムに統合あるいは吸収されていく。言い換えれば、呪術とは近代という巨大なシステムのうちにみられる綻びであり、それが我々のうちに取り込まれることにより近代のシステムは完結するのである。モダニティ論以前の我々と異なる非合理的な他者から、モダニティ論における我々の内なる非合理的な他者へ。呪術をあくまでも合理／非合理の枠組みにおいて、そして自己と他者の関係における自己のアイデンティティ補強の道具的役割として、理解する流れは一貫して継続しているというのである。

IV. おわりに

以上、概観してきたようなモダニティ論

以前と以後の呪術論の系譜、またその差異と同一性を前提とすれば、ここで問われるべきことは明白であろう。他者と自己の両極の往復作業を続ける呪術論は、モダニティ論という転回を経由した後、現在そして未来にいかなるステージを臨むのであろうか。そのような新たな呪術論に対して、私は暫定的ながら「ポスト・モダニティの呪術論」と名付けて議論の出発点としたいと考えた。その名称には、強力な吸引力を持ちながら、何かと多くの違和感を喚起する呪術の「モダニティ論」を超えるという理論的な野望と、それが未完で持続中の後期近代であれ、大きな物語が終焉したポストモダンであれ、一元的な近代とは異なった別種のポスト近代的な時代状況というコンテクスト的な眺望の二重の意味が込められている。

私自身の構想はといえば、先述のモダニティ論に対するカフェラーの批判を展開させた形で、呪術論を他者論と接合あるいは交差させながら、これまでの呪術論とは違った何か別の地平を開くというものになるだろう。その試みの一環として、呪術を我々と異なった他者として対置するのではなく、我々の内なる他者として取り込みつつ道具化するのでもない、3つ目の他者認識のあり方としての「他者Ⅲ」[東 2006]を模索する道筋や、フィールドにおける人類学者／ネイティヴや調査者／インフォーマントといった不均等な関係性において、呪術をめぐる「わからなさ」が刹那に生み出す偶発的な出会いへの構え[東 2008]などをこれまで細々と提示してきた。それらは振り返れば、本稿の冒頭に述べたような、呪術に対する理解や解明への道筋とは異なった、呪術の謎や不明性へのこだわりが生み出す／かもしれないポテンシャルへの希望であるといえよう。呪術を他者についての問題として捉えなおし鍛えなおしていく内に、そして他者としての呪術の根源的かつ徹底

的な他者性に惹かれ衝き動かされていく先に、自己すら、あるいは自己と他者の区分すら不明瞭になる地平へと到達できるのではないかという淡い希望を抱いている。それが、呪術について、わかってもわからなくてもひたすら語り続けるという冒頭で述べたような、ある種の「呪術論」として形をなしていくのを願うのである。

本特集に寄稿された二本の論考は、ともにそのような私の「ポスト・モダニティの呪術論」という呼びかけに対し、批判的な意味合いも含め寄せられた刺激的な応答である⁵⁾。神谷氏は、人類学者によるモダニティ論への過度な偏重は、むしろアフリカの呪術性＝未開性を際立たせ、公的な妄想を再生産し恐怖や不安を拡散させることに加担していると痛烈に批判する。では、私たち（人類学者）は一体どうすればいいのだろうか。氏の論考には、回答へのヒントが示されている。一方、川田氏は、大衆ミステリや UFO 言説についての議論を経由しながら、ポスト・モダニティの呪術研究の照準を「夢か現か」の状態に生じる恐れや不思議へと定めている。二名の論考は、呪術の恐ろしさについて、一見正反対の方向に議論を展開しながらも、多様なコンテキストへのエスノグラフィックなこだわりを確かに共有している。二つの論考が照らし出す、「ポスト・モダニティの呪術研究」が向かうべき道筋から、ある支配的な理論枠組みによるものだけでなく、異種混淆の呪術論が入り混じりながら、呪術が語られ続ける対象としていまここに現前しているということを、まず確認したい。その上で、本特集での議論が、今後活発に生産され続ける新たな呪術論の群れと遭遇し、衝突し、交わりながら、呪術をめぐる言説空間のスペースがさらに切り開かれていくこと、またそこに幅広い意味での「他者」への道筋が垣間見られるであろうことを期待して、本特集のイントロダクションを、いったん

閉じておくことにする。

註

- 1) 本特集に至るまでの経緯について述べておく。本特集は、川田牧人氏の科学研究費プロジェクト「東南アジア・オセアニア地域における呪術的諸実践と概念枠組に関する文化人類学的研究」、および白川千尋氏が組織する国立民族学博物館共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」におけるメンバー諸氏との刺激的なディスカッションの中から構想されたものである。また本特集は直接的には、2008年度九州人類学研究会オータムセミナーのセッション「ポスト・モダニティの呪術研究へ」での報告とコメント、そしてフロアからの発言に多くを負っている。ここで、関係各位に記して謝意を表しておきたい。
- 2) フランス構造主義、とくにレヴィ＝ストロースの呪術研究への評価点と問題点について、詳しくは拙稿 [東 2008] を参照のこと。
- 3) もちろん例外もある。とくにモダニティ論を先どる形で、南米の資本主義経済と呪術的想像力の連関について述べた [Taussig 1980] については注目しておく必要があるだろう。
- 4) 拙稿では以前、呪術概念がアフリカ地域に偏った民族誌データを色濃く反映し、葛藤から調停という社会変動のプロセスに注目する機能主義的な研究によって練り上げられたことを、疑惑・告発・制裁という社会劇が明確にはみられない東南アジアやオセアニア地域の呪術研究の事例との比較から検討した [東 2005]。
- 5) その他、本特集のもとになった 2008年度九州人類学研究会オータムセミナーのセッションでは、藤原潤子氏による報告と片岡樹氏によるコメントが行われたことも、ここに付け加えておく。

参考文献

東 賢太郎

- 2005 「呪術の脱中心化に向けて—呪術と近代論、および地域的多样性的観点から」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』no.82, pp.17-26.
- 2006 「親密な他者—フィリピン地方都市の呪術実践より」『文化人類学』第 71 巻 1

- 号, pp.1-21。
- 2008 「呪術・他者・理解—ポスト／構造主義と、あるエピソードを經由して」『社会人類学年報』第34号、pp.93-117。
- Comaroff, J. & J. L. Comaroff (eds.)
1993 *Modernity and Its Malcontents : Ritual and Power in Postcolonial Africa*. Chicago : University of Chicago Press.
- エヴァンズ=プリチャード、E. E.
2001 『アザンデ人の世界』(向井元子訳) みすず書房。
- フレーザー、J. G.
1951-52 『金枝篇 (全5巻)』(永橋卓介訳) 岩波書店。
- Geshiere, P.
1997 *The Modernity of Witchcraft : Politics and the Occult in Postcolonial Africa*. Charlottesville : University Press of Virginia.
- 浜本 満
2007 「妖術と近代—三つの陥穽と新たな展望」阿部年晴・小田亮・近藤英俊編『呪術化するモダニティ—現代アフリカの宗教的実践から』風響社。
- 石井 美保
2007 『精霊たちのフロンティア—ガーナ南部の開拓移民社会における<超常現象>の民族誌』世界思想社。
- Kapferer, B.
2002 *Beyond Rationalism : Rethinking Magic, Witchcraft and Sorcery*. New York : Berghahn Books.
- 近藤 英俊
2007 「瞬間を生きる個の謎、謎めくアフリカ現代」阿部年晴・小田亮・近藤英俊編『呪術化するモダニティ—現代アフリカの宗教的実践から』風響社。
- レヴィ=ストロース、C.
1972 「呪術師とその呪術」『構造人類学』(田島節夫訳) みすず書房、pp.183-204。
- メア、L.
1970 『妖術—紛争・疑惑・呪詛の世界』(馬淵東一・喜多村正訳) 平凡社。
- マリノフスキー、B.
1980 「西太平洋の遠洋航海者」(寺田和夫・増田義郎訳)『世界の名著 71 マリノフスキー・レヴィ=ストロース』中央公論社。
- Marwick, M.
1965 *Sorcery in Its Social Setting*. Manchester : Manchester University Press.
- Moore, L & Sanders, T. (eds.)
2001 *Magical Interpretations, Material Realities : Modernity, Witchcraft and the Occult in Postcolonial Africa*. London : Routledge.
- Taussig, M.
1980 *The Devil and Commodity Fetishism in South America*. Chapel Hill : The University of North Carolina Press.

(2009年5月28日 採択決定)